

外来語の基本語化の研究

—20世紀後半の新聞コーパスをもとに—

研究者：金 愛蘭

(独立行政法人国立国語研究所非常勤研究員)

研究成果要約

研究活動概要

従来の外来語の研究は、「外国語」から日本語としての「外来語」へと借用され、定着する局面、もしくは、そのような外来語が日本語語彙の周辺に「非基本語」として存在し続ける局面に注目してきた。それに対して、本研究では、20世紀後半の日本語において、抽象的な意味を表す外来語が基本語彙の仲間入りをしていく（＝基本語化していく）局面に注目し、そうした基本語化がどのような過程を経て行われたのか、さらに、それは（和語や漢語の類義語があるにもかかわらず）なぜ生じたのかを明らかにすることを目的に、以下のことを行った。

- (1) 20世紀後半の新聞記事を資料とした、大規模な「通時的新聞コーパス」の作成
- (2) 基本語化した（抽象的な）外来語の抽出
- (3) 個別の外来語についての、基本語化の過程の記述
- (4) 抽象的な外来語の基本語化にみられる類型や要因の発見

成果概要

- (1) 作成した「通時的新聞コーパス」の規模は、全体で1,000万字を超え、ページ数の極端に少なかった1950年、やや少なかった1960年を除けば、各年ほぼ200万字程度となり、20世紀後半の通時的な新聞コーパスとしては、他に例を見ない大規模なコーパスを構築することができた。
- (2) 作成したコーパスに対して、簡易的な語彙調査を行った。その結果をもとに、国立国語研究所（1987）の「増加傾向係数」を使って、基本語化したと考えられる外来語の候補を抽出し、そのリストを作成した。また、増加傾向の大きい外来語ほど、抽象的な意味分野の語が多く、逆に、具体的な意味分野の語が少ないことも分かった。この結果は、基本語化している外来語には抽象的な意味を表すものが多いことを示しており、外来語には具体名詞が多いという常識をくつがえすものといっている。
- (3) 2で得られた候補の中から、二、三の外来語について、それぞれの類義語（下位語）も含めて、その基本語化の過程を考察し、外来語の基本語化とともに類義語の使用が減少する傾向のあることを確認した。
- (4) 3の結果から、抽象的な外来語の基本語化に、既存の類義語（下位語）を整理・統合するような形でそれらに取って代わる、という類型を発見できた。そして、そうした外来語による下位語の整理・統合が、新聞の文章を概略的なものにしつつある20世紀後半

の文体傾向による可能性についても言及した。

成果活用について

本研究の成果は、国語辞典・外来語辞典における基本的な外来語の意味・用法の記述を、和語や漢語の類義語との関係も含めて、より詳しく充実したものにすることに利用できる。また、国語教育・日本語教育における語彙指導充実のための基礎的な資料としても利用できる。とくに、基本語彙や類義語の指導において、従来の和語や漢語のほかに、基本語化した外来語を加える必要性のあることを示し、同時に、加えるべき外来語についての具体的な情報を提供することができる。さらに、外来語に関する様々な言語問題の解決のためにも、本研究の知見を役立てることができる。今後、辞書編纂・言語教育・言語政策に関連する学会等での発表をとおして、本研究の成果を役立てていきたい。

今後の研究課題

作成した大規模な「通時的新聞コーパス」を整備し、得られた「基本語化した（抽象的な）外来語の候補」について、より詳細な調査・分析を行う。そして、その類義語も含めた意味・用法のより詳しい記述によって、外来語の基本語化の要因や類型を探り、その理論化をめざしたい。